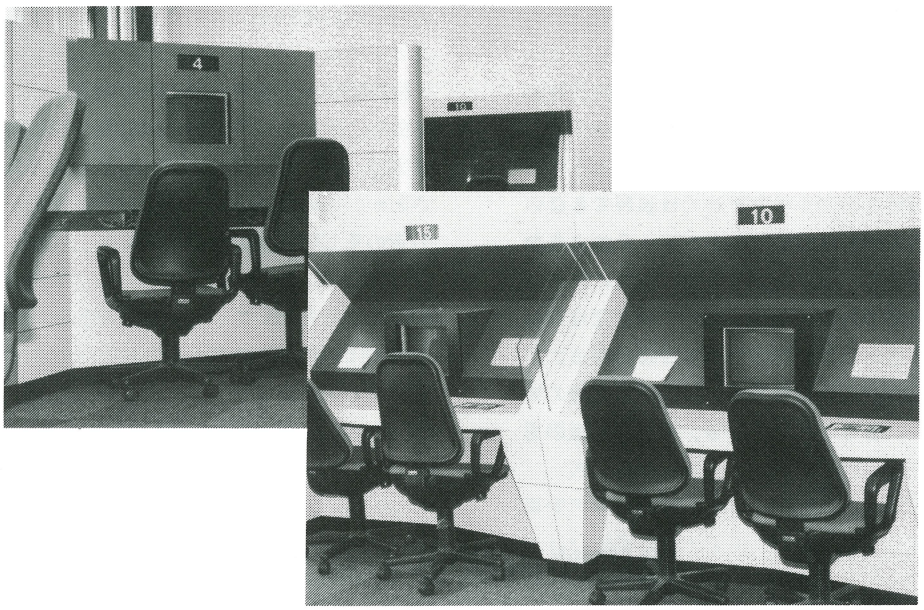
ISSN　0288－1594

AV JOURNAL

1990年12月　第 19 号



〈3階ビデオ自習室〉

目　次

音楽と音……附属図書館長　貝田　守……2
香港映画世界の輝き……中国語学科　深尾葉子……2
不規則用言／ｐ－ｕ／型の理解のために
……朝鮮語学科非常勤講師　奥田一廣……5
〈ＬＬ便り　1〉二つの静止画コピーシステムについて……7
〈ＬＬ便り　2〉出版物案内……8
「高度な対面コミュニケーション能力育成のための基礎的研究」
講演会・研究会報告……11
〈ＬＬ便り　3〉新規購入映像資料(レーザー・ディスク)一覧……12

大　阪　外　国　語　大　学

音楽と音

附属図書館長　貝田　　守

言うまでもなく音楽は音を素材としているから、表現手段としての音を発するものと、それを受け取る耳の感覚が問題とされる。音楽好きの私は、蓄音器の時代からレコードを聞き、ＬＰの時代を経て、テープからＣＤと移ってきたが、その間ずっと美しい音、臨場感のある録音を追及してきた。

それとは別に、音楽である感情を表現することに小さい時から興味を持ち、機会あるときは作曲技法を習って、作曲を続けてきて今に至っている。そのとき思うことは、頭の中で鳴っている音がどうしてもピアノとか琴とかフルートとかでは表現できない――なにかが違うと感じることがある。そのような場合は大抵作曲はうまく出来ないで、未完に終わってしまうことが多いのであるが、「この音ではないんだ」という思いだけが空虚に残ることになる。

作曲を一応完成させた後でも管弦楽では実際の響きが考えていた響きと異なるとき、やはり同様の思いに駆られる。時として他の人はその音でいいよというが、なにか納得しない。

先日ある会場でピアノの演奏をしたとき、私はよい音だと思ったのに、ここは響きが良くないという人もいた。あるテープレコーダで音楽を聞いたとき同時に聞いている二人が感想を異にするのを聞いたこともある。

機械によって再現される音であるから、それは宿命的なことであろうが、機械の良し悪しが大きく影響することは否定できない。しかし聞く人の耳の良さとか、心の良さとか、その日の機嫌とかが作用して音のそして音楽の受け取り方が、変わってくるのではあるまいか。人の耳は心の動きで聞き方が大いに変化すると聞いている。音の再生も機械的な発達だけでよいのであろうか。私はときどきそんなことを考えるのである。

香港映画世界の輝き

中国語学科　深尾　葉子

ここ数年、香港映画が輝いている。香港映画というと、日本で一般性を獲得しているのはカンフーものと、「キョンシーシリーズ」ということかもしれないが、いわば香港のヌーベルバーグともいえる作品群が出ていることを、映画やビデオに詳しい方はもう、とうに感知しているかもしれない。ここ、外大のビデオライブラリーにも加わり始めたそれらの作品たちは、街の映画館やビデオ屋さんにも気をつけていれば、密かに登場している。

香港の街で、映画は大きな位置を占めている。また映画の鑑賞料も日本に比べて格段に安く、市民はごく身近に映画に接しているといってもいい。それだけに、作られる映画の数もおびただしく、その世界は予想以上に深い。今日は、日本で見ることのできる香港映画を題材に、その豊かな世界の一端を紹介してみたい。

まず、香港のヌーベルバーグを日本に刻印したともいえるのは、香港ノワールと呼ばれている。一連の「男たちの挽歌」シリーズだといわれている。原題で≪英雄本色≫＊といわれるこの作品は、ひとことで言ってしまえば、「香港暗黒社会を超級バイオレンスもの」とでも形容されてしまうかもしれない。私自身、その強烈なバイオレンスシーンには、思わず顔をそむけたくなることも多々あるのだが、全篇を通じた緊張感と起伏に、思わずひき込まれてしまう作品だ。事実、地元香港や、台湾で大ヒット作品となり、その余波は日本にも上陸した。

しかし、話題を呼んだ本作品もさることながら、一つヒットがでるや、次々と「亜流モノ」パロディ篇が出される香港映画界の疲れを知らない商業的エ

ネルギーがまた面白い（これは、カンフーものや、キョンシーとも同じ）。なかでも、「男たちのバッカ野郎」と邦題された≪精装追女仔≫Ｖは、「挽歌」と同じ役者や登場人物を一部使い、本来シリアスなシーンを完全にパロディ化してちりばめたり、と「挽歌」併せて見ると、痛快に笑える作品となっている。このあたりは、まさに、映画を作る側が、見る側の愉しみをとことん知って、さらに自分たちもそれで愉しんでいる、という雰囲気が見られる。その距離感の近さは、もはや観衆に迎合する徹底したサービスの域を越えて、見るものと作るものの一体感すら、感じさせられる。

香港映画の面白味には、ひとつにこの映画を作る側と見る側、また映画に描かれている世界との距離感の近さがあげられるだろう。狭い香港で、映画の録画どりは街の名所で行われる。スクリーンの中に出てくる背景は、日頃自分達が身近に親しんでいる街の光景であり、隣の人か知り合いに合いに行くような気持ちで映画を見にゆく。また、そんな映画世界に支えられた、香港の役者たちも、実に生き生きとしてくるのである。

しかし、その狭さゆえに、役者として生き残るのも実際は並大抵ではない。一定のパターンの役だけをこなすのみでは、とうてい生き残れないため、男女ともに、二枚目から三枚目、シリアスからコメディ、アクションとあらゆるものをこなす。また、いったん人気がでると一年に十本近くの映画に出る、などということは珍しくなく、超過密なスケジュールとなる。これは、一方では役者泣かせの現状ではあるものの、そのことが他の映画世界には見られないタフな役者達を輩出させ、それがまた香港映画の魅力の一つとなっていることは否めない。

ここで、もう少し、お勧めの作品を紹介しよう。「挽歌」シリーズもさることながら、そのシリーズの製作にも参加している、ツイ・ハーク（徐克）という監督の作品をぜひとも勧めたい。この監督は、一九五一年ベトナムに生まれ、十五歳の時に香港に渡ったのち、アメリカのテキサスで映画の勉強をした、という経歴の持ち主で、日本では最近公開されたチャイニーズゴーストストーリーIIなどのＳＦＸ担当として、知る人も多いかもしれない。しかし、この人の手腕を見るなら、むしろ「ファントムブライド」（原題≪鬼新娘≫）＊や「上海ブルース」（≪上海之夜≫）＊を挙げておきたい。前者は、とある青年がひょんなきっかけで出会った美人幽霊と恋に落ちる、というものだが、これは目をみはるようなＳＦＸあり、ラブロマンスあり、人情味あり、アクションあり、そして最後には何故か泣かされてしまう、というまさにツイ・ハークの持ち味が存分に出た秀作だ。最近、日本でこの作品のマネでは？と思われる映画があったが（これは見ていないので何とも言えないが）そんなものと比較らないのでは、と思えるほどよく出来た作品である。

一方「上海ブルース」の方は、一九三七年の日本軍侵攻前夜を舞台とし、空襲の日に別れ別れとなった若い男女が、十年後に再会するという物語。これは、登場人物といい、画面のタッチといい、一九三〇年代上海で作られた名作「街角の天使」（≪馬路天使≫）＊を思わせるもので、激動の時代背景と、暖かみのある人間描写、そして全体を通して流れる、古典的ともいえるようなユーモア感覚、これらが何とも言えない雰囲気を作りだしている。また、この

〈ビデオ「上海ブルース」より〉

作品では場面の重ね方や、コミカルシーンのタイミングも絶妙だ。そんな、軽やかでのびやかなテンポに乗せられて物語の最後までくるのだが、そこでまたもや、じんわりと泣かされてしまう。ともかくこれは是非、「純な気持ちになって」一度、体験してみてもらいたい映画である。

香港の映画には、幾つか共通点ともいえるものがある。それは、作品のなかに大抵、社会のなかの「弱者」といえる人々が登場していることである。学校に行けなくて、字が読めなかったり、様々な職業を転々としていつもワリをくっていたり、といった主人公や脇役が、肩を寄せ合って生きる様子が、作品のどこかに描かれている。そして、香港映画のヒーローは、必ず、そんな仲間のために、ひと肌もふた肌も脱ぐという設定になっているのだ。その原型は、中国人にとっての一つの理想的な人間関係の形である「義兄弟」といったイメージでもあり、結社や幇（バン）を思わせるものでもある。

時に重大な歴史的背景を扱いながらも、それを重重しく描くのではなく、その中で生きる人々に、最大限の暖かい目を注いで見る、という香港映画の特徴は、現在香港が置かれている歴史的位置からも、十分にうなずける。多くの歴史的激動の舞台に位置付けられながら、往々にして、あらゆるイデオロギー的認識からはみ出した存在となってきた、香港の普通の人々の実感が、そこからはひしひしと伝わってくるのである。一九四一年の十二月、日本軍の香港侵攻を舞台とした「風の輝く朝に」（≪等待黎明≫）＊や、陥落直前のサイゴンを舞台とし、そこから香港に逃げかえる中国人を描いた「アゲイン」（≪英雄本色Ⅲ≫）Ｓなどは、まさにそういった感を抱かせる作品である。ちなみに「アゲイン」は先のツイ・ハークの作品で、作りに少々粗さはみられるものの、冒頭にでてくるサイゴンでの学生デモのシーンなどが強烈に印象に残る。

チョウ・ユンファやアニタ・ムイを始め、数え挙げればきりがないほどの名優たちをかかえる香港映画。彼らを通じて、香港から見たアジア史や、また「香港から見た」日本、さらに東京や大阪、が見えてくれば、それもまた面白い。そして、そういった視点を持つことは、意外に大切なことなのではないだろうか。

※文中の映画のあとに＊印のあるものは、大阪外大ビデオライブラリー所蔵のものを指し、Ｖとあるものは日本でビデオとして入っているもの、Ｓは劇場公開のみのものを指します。まずは、ビデオライブラリーにあるものから、体験してみて下さい。なお、製作年や監督名など詳細な情報は省略致しました。

あくまで香港映画を背景に活躍するチョウ・エンファ（周潤發）

不規則用言/ｐ→ｕ/型の理解のために

朝鮮語学科非常勤講師　奥田　一廣

日本語を母国語とするものにとって、朝鮮語の入門期の学習にはつぎの三つのポイントが有ると言われる。

1．語幹末子音（パッチム）
2．母音調和（母音の陰陽）
3．不規則（変則）用言

このうち不規則用言は、語幹末子音の有無や母音調和による母音の種類についても整合する語形の交替であるので、入門期では最も難しい学習事項としてあげられることが多い。

ここでは、不規則用言の理解のために、／ｐ→ｕ／型（／ｐ／変則用言）に例をとって、視聴覚教材の利用についてのべたい。

朝鮮語では／ｐ／（実際は内破音）で終る語幹に母音が後接するとき、一部の例外をのぞいて／ｐ／は／ｕ／＞／ｗ／に交替する。たとえば／komap-／（有難い）に連用形語尾の／ɔ／が後接すると、＊／komap ɔ／ではなく／komaw ɔ／（有難くて）となる。

ほぼ同様のことが日本語の歴史の上でも起っていることは、よく知られているところである。すなわち、「はは」は、かつては［ϕaϕa］と発音され［＊papa］と再構成されるとか「ふみ」は［humi］＜［ϕumi］＜［＊pumi］とさかのぼることができることを想起させる。このことは、助詞の／wa／を「は」と表記することにも表われている。

日本語が長い時間の中でたどった、この／ｐ／の歴史が、朝鮮語では語幹と語尾の接続という共時態の中で起っている、とも見ることができる。したがって、／ｐ→ｕ／という不規則は朝鮮語独自の形態的な語形交替ではなく、日本語の内にもある音韻的な現象であると理解できる。

さて、日本にも朝鮮にも「雅楽」といわれる古典音楽の分野がある。中国音楽でも同様の分野がある。現在、朝鮮でも中国でも伝統的な雅楽（国楽）の楽譜を使用する場合もあるが、多くの場合、ドレミの階名（ふつう１、２、３……の数字で示す）の楽譜を使用している。ところが日本の雅楽は独自の楽譜を保持している。たとえば龍笛（横笛）では音名とは別に「唱歌」というのがあり、曲は、音名の連続を憶えるのではなく、唱歌を憶えて、演奏する。この唱歌では、「ハ」は「ファ」［ϕa］、「ヒ」は「フィ」［ϕi］と読む。ここにも／ｐ／＞／ϕ／＞／ｕ／の変遷の残滓を見ることができる。

また、全部の曲を見たわけではないので確実なことは言えないが、朝鮮や中国（漢族）の伝統音楽では、ドレミの音階でいうと「ファ」と「シ」の音の無いものが多くあったようだ。いわゆる「ヨナ（四七）ヌキ」に近いと思われる。ヨナヌキは日本音楽の特徴として教わったように思うが、日本音楽の特徴といわれているものが中国や朝鮮の伝統音楽にも有るとすれば、それは日本音楽の特徴と言えるだろうか。

ところが、もう少し詳しく見ると、そこに特徴が見えてくる。

かつて朝鮮文字（ハングル）には、現在では使っていない「ㅸ」という文字があり、／ｂ／を表したといわれる。この文字は現在の／ｐ→ｕ／という不規則で語形が表れるのと同様の環境でも表れていることから、朝鮮語では／ｐ／＞／ｂ／＞／ｕ／，／ｗ／の変遷の歴史があるとされる。これは、日本語の／ｐ／＞／ϕ／＞／ｕ／の歴史とはいささか異なることが分る。

一見同じように見える楽器でもそうだ。

笙（しょう）という楽器がある。中国の笙は日本の笙に比べて、息を出し入れする口が長く伸びている以外は、竹管の本数も同じだし、形が大きいだけで、たいした違いはない。しかし、よく見ると指で押える穴の位置が少し違う。竹管を１本抜いてみると、日本の笙の舌（リード）は丸くならんだ管の内側に付いているのに対して、中国の笙は外側に付いている。日本の笙は管を直立させるが、中国の笙は、管を右へ少し倒すようにして吹く。演奏法ともなると、日本の笙は和音の出る「合竹」が主となるのに対して、中国の笙は、和音・単音自由自在で、単独

でメロディーを奏でることもできる。笙の舌と竹管は密蠟で付けるが、日本の笙は演奏の前後に遠火で暖めて水気を取り、密蠟をなじませなくてはならない。中国の笙は暖めなくてもよい。

朝鮮の笙については、まだ手にとるチャンスが無いが、見たところ、日本の笙と同様、息を出し入れする口が短く、管を傾けずに垂直に立てて吹き、合竹での演奏のみのようである。音は日本のものとは違うようであるが詳しくは分らない。

雅楽は中国で生れ、朝鮮と日本にも伝ったといわれ、その比較そのものにも興味のあるところだが、以上の事も朝鮮語の不規則用言を理解する一助となると思われる。

った。L.L.の専門家の手をたいしてわずらわせることなく、いちおうのビデオ教材を製作できるようになったと言えるであろう。学習言語の使用地域の風物を撮ったり、ネーティブのメッセージを伝えたり、他のソフトと組み合わせて編集したり、「語学」「文化」を越えた種々の可能性が有ると思われる。撮ったものを使用しての授業は、一般教室用に移動式のビデオの台があるのでそれを活用すれば、L.L.以外でも行うことができる。

朝鮮語の不規則用言はふつう「講読・文法」の時間にまとまって学習する。視聴覚教材は毎時間使用するわけではないから、L.L.教室を使用せず、一般教室を使用しているが、時おりビデオを使った方

〈NHK TV番組「ピョンヤン美術団日本公演」より〉

ところが、せめて日本の笙の形なりとも知る人でないと、筆者の以上の提案は、「ああ、そんなものなのかなぁ。」という程度で、たいした意味を持ちえないであろう。学習者にも実際に手にとって見てもらえれば良いのだが、中国・朝鮮・日本の雅楽の楽譜を紹介し、それぞれの楽器を見せ、唱歌と演奏を聞かせるということは、教室での作業では困難であると思われる。特に、笙の竹管を一本抜いたり入れたりする際、舌や密蠟を傷つけないよう注意を要する。取扱い方によっては音が狂ったりするが、舌の調整（調律）のできる人は、演奏のできる人以上に少ない。調律に出して出来るまで何ヵ月も待たされる事も少くない。

そこで視聴覚教材を使用することになるが、最近では小型のビデオムービーなるものが出て、自作の映像を音とともに撮ることが手軽にできるようにな

が学習効果が上ると思われる時もある。ただし、外大には移動式のビデオの台は教務課と二部にそれぞれ1台しかないので、筆者と同じ時間に授業を担当していらっしゃる先生がたにはビデオの台をお使いにならないようお願いしなければならない。

日本と中国と朝鮮の雅楽の楽器・楽譜、そしてその演奏などから撮って、語学教育に活用していきたいものである。

〈ＬＬ便り１〉

二つの静止画コピーシステムについて

視聴覚資料係

前号で全体的な視聴覚教材作成サポートシステムを紹介しましたが、今回は、ビデオテープ、スライドの映像や書籍等から簡単にプリント画やＯＨＰシートが作成できる二つの静止画コピーシステムを紹介します。

まず一つは、カラービデオプリンター（ＵＰ―5000，ＳＯＮＹ社）を使用する方法です。この機器は、入力ビデオ信号を８ビットのデジタル信号に変換するので高画質のプリント画、ＯＨＰシート（148×210㎜）を作成することができます。

入力媒体用機器としては、ラック据置型としてＶＨＳビデオコーダー、タムロン・フォトビックス（写真映像用）があります。また、ラック本体のＡＵＸ入力（ＢＮＣ）から８ミリビデオ等の映像信号も入力することができ、ビデオプリンター本体にもＳ端子入力も付いていますので一般的な映像信号は、ほとんど使用できると考えられます。

操作の方法は非常に簡単で、ビデオテープの映像をコピーしたいとすれば、テープを再生し、自分の欲しい場面で〈ＭＥＭＯＲＹ　ＩＮ〉ボタンを押し、〈ＰＲＩＮＴ〉ボタンを押すだけで約１分でプリント画、ＯＨＰシート（150×210㎜）が出てきます。欲しい画面の変更も〈ＳＫＩＰ〉ボタンの操作で簡単に取り消し、変更することができます。また画面は、１画面（フルサイズ）、４画面、９画面、スプリット画面、分割画面、それらの合成画面にレイアウトすることができます。（写真①）

次に、消耗品ですが、プリント画作成ならカラープリントパック（ＵＰＣ―5010，100枚分、¥18,000）、ＯＨＰシート作成ならＯＨＰプリントパック（ＵＰＣ―5030，50枚分、¥15,000）が必要です。

もう一つの方法は、ビジュアル・プレゼンテーション作成機プレゼスＶＣ365（ＲＩＣＯＨ社）を使用する方法です。これは、一般の複写機と同じ感覚で、原稿（A4.5×７インチ）をセットすれば、プリント画なら１分、ＯＨＰシート（73×95㎜）なら４分で作成することができます。消耗品としては、プリント画作成ならポラカラータイプ669（48枚、¥12,738）、ＯＨＰシートならポラカラータイプ691（24枚、¥7,095）が必要です。

どちらのシステムも消耗品が、１枚あたり約200円～300円と高いですが、映画にでてくる風景や外国人の身振りなどをプレゼンテーションしたい場合など即時性の点からみれば、かなり利用価値があるようです。

写真①　〈ビデオプリンターで作成したプリント画〉

〈ＬＬ便り２〉

〈出版物案内〉

1978年より本年まで、「大学教育方法等改善」、「視聴覚教材開発」等のプロジェクトにより出版された論集、目録、語学テキスト（映像資料 or 音声資料付）、視聴覚資料係発行のＡＶ資料所蔵目録の案内です．過去のＡＶジャーナルで紹介している出版物もありますが、ここで改めて紹介します。

論　集

・「諸外国における外国語教授法研究の実情」1979

アメリカの言語理論に基づいた視聴覚教授法　舟阪　晃

西ドイツにおける視聴覚外国語教授法　友田　舜三

フランス語の視聴覚教育法　松井　三郎
—資料紹介—

ソヴェート教授法学における「視聴覚教授法」の意義について　生田美智子

・「ＬＬ授業の効果の分析と評価」1979

インド・パキスタン語学科におけるＬＬ授業の実際と反省　溝上　富夫

ビルマ語初級ＬＬ教育の現状　南田みどり

英語教育におけるＬＬ授業の効果　舟阪　晃

中級ドイツ語の書き取りにおける誤りの調査　乙政　潤

デンマーク語教育におけるＬＬ利用　クヌー・クリステンセン　間瀬英夫・序

・「視聴覚資料の外国語授業への有効な取入れ」1980

視聴覚外国語教援法とその実践　友田　舜三
—西ドイツの場合—

ソヴェートにおける視聴覚メディア利用の理論的基礎　生田美智子

外国語の口頭練習における視聴覚資料の効果に関する実験的研究　乙政　潤
—中級ドイツ語の場合—

イスパニア語教育のための諸方法の分析　中岡　省治

習得困難な外国語音の学習　福居　誠二
—音声分析機器利用の現状と改革案—

ビルマ語発音の習得状況について　南田みどり

一般音声学テープ教材の作成　間瀬英夫・福居誠二

朝鮮語発音コース作製における諸問題　北嶋　静江

報告　本邦初「ベトナム語中級視聴覚教材」製作始末記　冨田　健次

・「視聴覚メディアのシステム化と外国語授業の体系化」1981

ビルマ語聴解力テストに見る誤答例の分析　南田みどり

一般音声学テープ教材プログラム　福居　誠二

「情報伝達構造」に習熟するためのCommunication Practiceの必要性　大木　充

構造練習問題の形式的分析に関する覚え書き　中岡省治

聴覚教材の品質　福居　誠二

ペルシア語視聴覚教材の作成　岡崎　正孝

ベトナム視聴覚教育試論　冨田　健二

視聴覚教育雑感　森本　久夫
—イスパニア語の場合—

ドイツ語初級文法の「個別学習」プログラム作成の試み　乙政　潤

上智大学・同時通訳教育実施状況見学報告　向　高男・田川弘雄

・視聴覚外国語教育研究　第５号　1982

ビルマ語書き取りテストに見る誤答例の分析　南田みどり

コミュニケーション練習としての設問形式のＬＬ練習　—挿絵の効果と関連して—　乙政　潤

イタリア語の単語アクセント，文アクセント、肯定・疑問のイントネイーション、感情表現の聞き取り　郡　史郎

一般音声学テープ教材
—子音編・閉鎖音—　福居　誠二

ドイツ文化史のスライドづくり　布施　俊夫

「トルコ語教本」作成を終えて　勝田　茂

・視聴覚外国語教育研究　第６号　1983

ＬＬ教室でのペアー学習：メディアテック
トム・ペンダーガスト
フランス人の身ぶり
—類似の身ぶりはいかにして区別されるか—
大木　充
フォーカスイントネーションと語順への反映・フランス語についての音響・知覚研究
大木　充・郡　史郎
On the Secondary Cue for the Perception of Stop Consonants in Japanese　福居　誠二
外国語教育雑考　橋本　勝
ブラジル・ポルトガル語の視聴覚教材作成における問題点　河野　彰
資料　ドイツ語中級書き取りにおける音声面での誤り調査

・視聴覚外国語教育研究　第７号　1984
ＬＬ授業の一環としてのビルマ語書き取りの試み
南田みどり
場面に対する学生のコメントのテキスト分析
乙政　潤
発話形成メカニズムにおけるイントネーションの機能について　生田美智子
インドネシア語の常用色名　松野　明久
日常会話と非日常会話　大橋　克洋
デンマーク語の半強勢についての考察
—Fremmedarbejder の場合—　福居　誠二
フランス語中立的発話の音調
郡　史郎・大木　充

・視聴覚外国語教育研究　第８号　1985
４コママンガの言語テキスト化　乙政　潤
笑い声の音響的性質　郡　史郎
同時通訳の諸側面　船山　仲他
ルーマニア紀行（その１）　伊藤　太吾

・視聴覚外国語教育研究　第９号　1986
談話におけるフランス語イントネーション
郡　史郎・大木　充
外国語学習者の無意識の言語的態度　乙政　潤
ビデオを聞いてＬＬ授業をもっと楽しく，もっと効果的に　大木　充
『スワヒリ語テキスト』の作成に際して
中島　久
スライド目録　ートルコ編ー作成を終えて
勝田　茂

・視聴覚外国語教育研究　第10号　1987
発話行為の相互学習における視覚・視聴覚機器の利用　Ａ・Ｖ・サンニコヴァ・訳　小野理恵
言語行動としての翻訳
—“Max und Moritz”のコメントの場合—
乙政　潤
スウエーデン語音声の教材作成　福居　誠二
日本語の遊離数量詞の談話機能について
大木　充
ルーマニア紀行（その２）　伊藤　太吾
初心者のテキサス，1984—1986年
藤元（香川）優子

・視聴覚外国語教育研究　第11号　1988
コミュニケーション教育における体系性の問題と母国語の役割
Ａ・Ｖ・サンニコヴァ・訳　小野理恵
コミュニケーションにおける非言語伝達手段記述のこころみ　生田美智子
—外国語としてのロシア語教授法の観点から—
コミュニケーション行為としての翻訳
—成功の要件と不成功の原因—　乙政　潤
フランス語２回生ＬＬ授業中のテープテストおよび書き取りテスト結果報告　熊野真規子
—発音と聞き取りの問題点—
「玉の海」（└タマノ┐ウミ）と「玉」の「海」（└タマノ└ウミ）　郡　史郎
—大阪語の２種のピッチ下降—
中国見聞録または、私家版『大連日誌』
林田　雅至

・視聴覚外国語教育研究　第12号　1989
マンガにおける身体的メッセージのはたらき
乙政　潤
Teaching Filipino as a Foreign Language, The Japanese Experience-Some Random Prescriptions　Rosario Torres-Yu
異文化テクストとしての洗面台　生田美智子
コミュニケーションのための英語教育のあり方

井上　紀子
《視聴覚・ビデオ鑑賞会》考　林田　雅至

・視聴覚外国語教育研究　第13号　1990
情報伝達機能から見たイラストレーションとキャプション　乙政　潤
ビデオを用いて「講読」の授業をもっと楽しく，もっと効果的に　大木　充
—劇場用映画のシナリオを第二外国語科目「中級講読」用に編集する—
イタリア語のイントネーション：フォーカスと音調　郡　史郎
外国人日本語学習者のアクセント
—あるアメリカ人の場合—　角道　正佳
私説《視覚映像文化論》
その５：連続幼女殺害事件・考　林田　雅至

テキスト

・Textbook of colloquial Egyptian Arabic : for language laboratory ; Vol. 1
1978.3　福原　信義(編)
・Audiovisueller Deutschunterricht für Mittelstufe　1978.3　乙政　潤(編著)
・ベトナム語中級視聴覚教材＝Tài liêu tâp nghe nhìn tiếng Viêt (Trung cấp) Introduzione alla pronunzia italiana　1980.3　藤村昌昭(編)
・Comme un boomerang (ブーメランのように)
Rossigneux, Jean-Claude (編著)
—シナリオと解説—
・ペルシア語の発音・ペルシア語の書き方
1981.2　モルーケ・カーゼンプール(吹込み)
岡崎正孝(資料作成)
・Português : Falar e entender gurso intermediário　1982.3　河野　彰
・Introduction aux gestes français
1982.3　Rossigneux, Jean-Claude, 大木　充
・中級ビルマ語会話　1982.3　南田みどり
・トルコ語教本　1982.7　勝田　茂
・フランス人の身ぶり辞典
1983.2　大木　充，Rossigneux, Jean-Claude
(編著)
・Exercícios de pronúncia portuguesa
1983.3　河野　彰
・ベトナム語重要文法語彙用例集　1
1984.3　冨田健次
・Portugues moderno atraves de extratos
1984.3
・ビルマ語入門　—発音編・文字編—
1985.3　南田みどり
・スワヒリ語テキスト　1986.3　中島　久(編著)
・Tingting shuoshuo : Zhongwen keben＝听听説説：中文課本　1986.3　上神忠彦(編著)
・家と世界：シナリオ　1988.3　溝上富夫(訳)
・フイリピノ語テキスト　1988.3　津田　守(編著)
・ペルシア文字の書き方
1988.3　ラジャブザーデ，ハーシェム(編)
・実践ロシア語教程(和文露訳)＝ПРАКТИЧЕСКИЙ КУРС РУССКОГО ЯЗЫКА　1988.3　小野理恵(編著)
・Dansk lydlaere for japanere
1989.1　Andersen, Nina Møller
・スペイン語ルーマニア語比較文法・会話
1989.1　伊藤太吾
・実用中等モンゴル語
1989.2　橋本　勝，ルハックワー
・カセット・ヒンディー語入門　1989.3　溝上富夫
・СЛУШАЕМ РУССКУЮ РЕЧЬИ
1989.3　生田美智子・プロートニュヴア，Г. Н.
・ПЛОТНКОВА, Г. Н.
(ロシア語入門教科書)
・フランス語からスペイン語へ　1989.10　伊藤太吾
・タイ語の重要は文法と会話
1990.3　宮本マラシー

目　録

・スライド目録（付解説とテキスト）　1981.3
—ロシア編—
・スライド目録　—イラン編—　1981.3　岡崎正孝
・スライド目録　—パキスタン編—
1982.3　麻田　豊(編)
・スライド目録　—ドイツ文化史編—
1982.12　布施俊夫(編)
・スライド目録　—ロンドンと詩人達—
1984.1　大橋克洋

・スライド目録
1985.3　インド・パキスタン語学科(編)
—北インドを中心とする服飾、装飾—
・スライド目録　—トルコ編—
1986.3　勝田　茂(編)
・スライド目録　—ルーマニア編—
1987.3　伊藤太吾(編著)

所蔵目録

・視聴覚資料所蔵目録　—ビデオ編—　1987.9
・視聴覚資料所蔵目録　—映像資料編—　1989.3
・視聴覚資料所蔵目録　—音声資料編—〔予備版〕
1989.3

〈スタジオでの語劇ビデオ撮り〉

「高度な対面コミュニケーション能力育成のための基礎的研究」講演会・研究会報告

「高度な対面コミュニケーション能力育成のための基礎的研究と題する研究プロジェクトが教育研究学内特別経費の援助を得て現在進行中である。これは視聴覚教育委員が中心となって企画したもので、研究代表者はモンゴル語学科橋本勝助教授、参加メンバーも視聴覚教育委員が中心となっている。

このプロジェクトの第1回合同研究会が、10月18日午後、図書館棟4階デシジョン・ルームを借りて行われた。対面コミュニケーションそのものの研究ということだけでなく、将来の語学教育のあるべき姿をも探る新しい研究の出発ということで、第II部ドイツ語学科の乙政潤教授に、「コミュニケーション研究を始めるにあたって」と題する講演をいただいた。乙政教授は、コミュニケーション教育の観点からのドイツ語教育法の開発に精力的に取り組んでおられ、また、最近まで長年にわたり視聴覚委員長として本学の視聴覚教育に多大の貢献をなされている。

講演では、乙政教授はコミュニケーション研究の対象と、研究途上で遭遇しうる問題点について述べながら、教育の立場からのコミュニケーション研究の枠組みを提示された。日本の文学作品テキストを使った具体的な分析を随所に引用しながら展開されたコミュニケーション論は、まさに本学の特色を生かしたコミュニケーション科学研究の展望を示すものであった。

続いて、第2回研究会は、11月29日、やはり図書館デシジョン・ルームで行われ、タイ・ベトナム語学科宮本マラシー講師が「挨拶について」と題する研究報告をされた。タイ人と日本人の言語行動の観察資料に基づいた報告は、「あいさつ」の概念そのものに関する文化差の話から始まったが、「あいさつ」の必要性とは何かという問題から端を発して、コミュニケーションそのものの役割についての文化差、いわば「コミュニケーション文化」の差にまで話が及んだ。出席者からは、日本、中国、ビルマ、ドイツ、フランス等のあいさつ行動についての情報提供をはじめ、活発な論議が展開された。

第3回研究会は、第2回の成果をもとに、こんどは中国のあいさつことばについての中国語学科大河内康憲教授の報告を伺うことになった。

以上の研究会の成果は年度末に刊行物として出版する予定である。

なお、研究代表者橋本助教授の海外出張のため、11月1日よりインド・パキスタン語学科の溝上富夫教授が研究代表者代行となった。　(郡 記)

〈ＬＬ便り３〉

新規購入映像資料(レーザー・ディスク)一覧

その６　　(1990年10月現在)

資料別	音声	所要時間	資料番号
Annie Hall (アニー・ホール)	(英語)	1'34"	E-0004
Casablanca (カサブランカ)	〃	1'45"	E-0125
An officer and gentleman (愛と青春の旅立ち)	〃	2'00"	E-0157
A man for all seasons (わが命つきるとも)	〃	1'35"	E-0192
Die hard (ダイ・ハード)	〃	2'12"	E-0402
Major league (メジャーリーグ)	〃	1'47"	E-0403
Rain man (レインマン)	〃	2'15"	E-0404
Roger rabbit (ロジャー・ラビット)	〃	1'44"	E-0405
The whales of August (８月の鯨)	〃	1'31"	E-0406
A world apart (ワールド・アパート)	〃	1'51"	E-0408
Ben-hur (ベン・ハー)	〃	3'42"	E-0409
E. T. (E. T.)	〃	1'55"	E-0410
Love is a many-splendored thing (慕情)	〃	1'42"	E-0411
The go-between (恋)	〃	1'51"	E-0412
Gigi (恋の手ほどき)	〃	1'56"	E-0414
Mississippi burning (ミシシッピー・バーニング)	〃	2'06"	E-0415
Less than zero (レス・ザン・ゼロ)	〃	1'38"	E-0416
The grass menagerie (ガラスの動物園)	〃	1'38"	E-0417
The mission (ミッション)	〃	2'06"	E-0418
St.Elmo's fire (セント・エルモス・ファイアー)	〃	1'48"	E-0419
Paris, Texas (パリ・テキサス)	〃	2'26"	E-0420
Doctor Zhivago (ドクトル・ジバコ)	〃	2'40"	E-0421
The unbearable lightness of being(存在の耐えられない軽さ)	〃	2'53"	E-0423
Der Himmel uber Berlin (ベルリン天使の詩)	(ドイツ語)	2'08"	D-0036
Orfeu negro (黒いオルフェ)	(フランス語)	1'47"	F-0121
L'idiot (白痴)	〃	1'36"	F-0122
Au revoir les enfants (さよなら子供たち)	〃	1'46"	F-0124
Jean de Floretle : Manomn des sources (愛と宿命の泉)	〃	1'31"	F-0131
Cria cuervos (ガラスの飼育)	(スペイン語)	1'47"	S-0023
El dorado (エル・ドラド)	〃	3'01"	S-0026

編集後記

◇ Audio Visual Journal 第19号をお届けします。前号に続き、教材作成サポート・システムの中の静止画コピー・システムを紹介しました。

AV Journal —第19号—

1990年12月20日発行

編集　大阪外国語大学視聴覚教室委員会
附属図書館視聴覚資料係

発行　大阪外国語大学

印刷　㈱ムラタ印刷